



Dialogue

Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2011年10月22日

【アカデミック・プログラム(フォーカス2: 分野間の対話)】

環境研究ワークショップ～「エコ・キャンパス」実現に向けた学生の提言



献学60周年記念事業
国際基督教大学



ICU献学60周年記念事業 2011年10月22日(土)

【アカデミック・プログラム(フォーカス2: 分野間の対話)】
「環境研究ワークショップ～「エコ・キャンパス」実現に向けた学生の提言」

対象:学生、教職員、大学常務理事

場所:国際基督教大学 本部棟206号室 ポスターセッションを同時開催

環境研究ワークショップ

—「エコ・キャンパス」実現に向けた学生の提言

「何か一つでもいい。学生、教職員、誰もが肩書を取り払い、一人のICU構成員として、今日のディスカッションからICUをもっとエコフレンドリーな大学するために具体的なアクションプランを提言し、実行に結び付けましょう。一步踏み出すんです！」

本ワークショップのファシリテーター・布柴達男教授の力強いこの呼びかけに、参加者誰もが意気込みを新たにした。ここに集まったのは、学長、副学長、客員教授をはじめ教職員、そして1年生を含む学生たち総勢約40名。このワークショップへの期待度がうかがわれる面々だ。2011年春学期に開講された一般教育科目「環境研究」を履修した学生が、6月に大学食堂



で行ったプレゼンテーションをもとに開催される運びとなったが、そのきっかけは発表を聞いた日比谷副学長の発案だ。プレゼンテーションだけで終わらせるのはもったいない、ぜひこの成果を題材にディスカッションする場を設けようと、今回のワークショップが実現した。

「ICUには環境宣言がありますが、実は知らない人が多いんです」と開会の挨拶で日比谷副学長は改めてICUの環境宣言を紹介し、ICUの自然環境を守るため、さまざまな立場から知恵を出し合い、考え、行動につなげたい、と抱負を語った。

Dialogue

Creating the Next 60 Years



まず第1部では7つの学生グループがそれぞれのテーマ(Global warming, Radiation, Lifestyle, Power, Water, Waste, Business and Economy)に沿って、新しいデータも加えてプレゼンテーションし、第2部では、その発表から得た情報、そして日頃自分が考えているアイデアも織り交ぜながら、グループディス

カッションを行い、「やっぱり環境は大事だね」で終わってしまうのではなく、討議の中から具体的なアクションを導き出していくという流れでワークショップは始まった。



第1部 7グループのプレゼンテーション

グループ発表1

Global warming

二酸化炭素と地球温暖化

温暖化に対する三鷹市の現状・対策、ICU内における現状・対策について、二酸化炭素に焦点を当て考察する。まずは、「ICU生に対する温暖化及びICU環境宣言への意識調査」である。学生食堂で100人を対象とし、無作為に口頭調査を行った。その中でも目を引くのが、「あなたは温暖化が進んでいると思いますか？」という質問に対し、全体の4分の1にあたる23人が「いいえ」と答えたことだ。また「ICUの環境宣言を知っていますか？」という質問に対しては、予想通り86人が「いいえ」と答え、また「はい」と答えた人の中でも、環境宣言の内容まで知っている人はほとんどいなかったという。

温室効果ガスの排出量のデータ公表、三鷹市役所中庭の芝生化の促進など積極的に温暖化対策を進めている三鷹市に対して、ICUは豊かな自然環境に恵まれているにもかかわらず、樹木の管理を始め、まだまだ温暖化対策に関して改善する点はたくさんあることがわかった。そのためにも、

- ・環境宣言を全学生、全教職員に知らせる
- ・環境宣言の内容を具体化し、環境に配慮した大学になる
- ・自然エネルギーの導入

などが、課題として挙げられた。



グループ発表2

Radiation

放射線とICU

「24という数字はいったい何だと思いますか？」という学生からの投げかけに、返答できる参加者は誰もいなかった。実はこの数字、日本の電力が原子力に依存している割合、つまり日本では24%の電力が原子力によって賄われているのだ。



夏休みに海外英語研修プログラムで訪れたイギリスのサセックス大学で、海外の学生を対象に「震災について話してみよう」というオープンスペースを開催したという体験から、多くの海外の学生が、「日本は危ない」と感じていることがわかり、また自分たちも含め、原子力に関して知識が不足している、と実感したという。

放射能漏れ、内部被曝、外部被曝と言葉は横行しているが、果たして中身まできちんと理解しているだろうか。今回のポスター制作を通じて、自分たちも放射能について学ぶことができ、また過剰に怖がるのではなく、放射能を理解するための正しい知識を持ち、きちんと状況判断することが必要だ、と締めくくった。

グループ発表3

Lifestyle

ICUにおける食・自転車・自動販売機と環境

まずは大学食堂とICU環境宣言について、バーチャルウォーターの観点から考えてみようという提案があった。

このバーチャルウォーターとは、食料を輸入している国において、もしその輸入食料を生産するとしたら、どの程度の水が必要かを推定したものだ。

日本の食料自給率は約40%であり、2005年において、海外から日本に輸入されたバーチャルウォーター量は約800億 m^3 、これは、日本国内で使用される年間水使用量とほぼ同じなのだという。大学食堂で使用している食材を調べてみると、野菜に関しては国産品が多いが、肉類は輸入品が多く、バーチャルウォーター、そして食材の輸入量と輸入輸送距離を掛け合わせたフードマイレージの観点から見ても、環境負荷が高いことがわかる。

また国内でも輸送距離が長いと、環境に対する負荷が高くなるので、地産地消を進めるべきであると考えられるが、この点について大学食堂に意見を求めたところ「地域の活性化、エネルギー消費の低減、物流コストの削減など、様々な観点からとても良いことだと思うが、現実的には、仕入れルートの確保、食材の安定供給など恒常的に行うことは難しい。フェアなどで扱うことは出来るかも知れない」という返答があった、という。

その点も踏まえ、改善点として実際に地産地消を意識してもらえるようなフェアを開催し、学生の意識向上を図ること。また、一般科目で、食と水に関する授業を行い、学生の意識を高めることも大事であると、結論付けた。



グループ発表4

Power

ICUの電力事情 「無駄」を見つける

大震災、福島第一原発事故によるこの夏の電力不足にともない、ICUも節電を余儀なくされたが、ICUはどのように節電したか？

そしてこれを機に、どのような無駄が見直されるべきか、という点から考察した。

寮を例に挙げると、昨年9月と今年9月では、消費電力が31%削減されているが、電化製品の割合が高く、無駄削減の余地はあると思われる。また自分たちが使った光熱費が、次年度の寮費に反映されるという事実をきちんと認識し、寮生の意識を高め、こまめに電気を消すようにしていくべきであろう。その動きとして、银杏寮では節電委員会が発足、これからハウジングオフィスに情報開示を求めていくとのことで、ぜひ大学対応してほしい、という意見が出た。

この夏の節電対策として、理学館の空調設備が停止し、そのため実験機器が破損、実験に支障をきたし、修理費用もかかったことから、節電に関しては、無駄な部分と必要な部分を細かく吟味しなければならず、マイクロとマクロの視点が必要であることがわかった。



グループ発表5

Water at ICU

ICUの水はどこからきているのか…実は、ICUで使われている水の90%以上は、敷地内(湯浅記念館の北側)にある井戸からくみ上げられ、フィルターにかけられた後に、同位置にある浄水場で浄水されている。

節水に対する取り組みとしては、ノズルを小さくする、節水コマ、雨水、リサイクルに関しては実施されておらず、リストラップ(汚れた水を洗浄する)と節水型トイレは導入されている。しかし、今回の調査の結果、図書館における数年間に渡る漏水に大学側は気付いていなかったという事実を知り、ICUとしては、法律に則った処置は行っているが、もっと水質をよくしよう、節水しようという積極的な動きはなく、環境宣言をだしているにもかかわらず、向上的な取り組みがなく、また学生に対しても、節水の意識を高めることが大事であると提案した。



グループ発表6

WASTE

本館、大学食堂、三省堂、自転車置き場、落ち葉・芝、と5つの場所における、ごみの現状と対策が発表され、またゴミがどのようにリサイクルされているか、その行程を調査した。その結果、ICUで発生した可燃物系のごみの中で新聞・雑誌・段ボールなどの紙類は再利用率100%で、不燃系廃棄物はすべて再利用されている、という点からみても、ICUが廃棄物に関して一定の取り組みを行っていることがわかった。



また、ReActやOIKOSなどICUの学生団体の取り組みは評価できるものであろう。OIKOS(オイコス)は、フリーマーケットや、No Advertisementと書かれたものを本館のメールボックスに貼ることで、チラシを受け取らない活動を行っているが、一番力を入れているのはDRS(Dish Reuse System)と呼ばれるものだ。これは、サークルが所有するプラスチック製のお皿をICU祭などのイベントを行う際に貸し出し、洗いながら使うことで、ごみを削減する目的の運動をし、学外の団体やイベントにも貸し出しているのだ。

このように、学生団体としては、自転車のリサイクルや学園祭の環境配慮、リサイクルキャップの日常的な回収などを行っているが、まだまだ学生の間でも知られていない。大学側の協力による広報、そして自転車レンタル制度等新たなシステムも必要だ。また学生に配布される資料の電子化をもっと進めるべきだとの意見は、早急に検討するべきだと指摘した。

グループ発表7

Business & Economy

「学校法人国際基督教大学(以下、「ICU」と言う)は、キリスト教精神に基づくりベラル・アーツ大学として、そのすべての活動においてキャンパス環境への適切な配慮と十全な管理に取り組むことを宣言する」という言葉で始める環境宣言のもと、はたしてICUは、どのような取り組みを進めているのか、その実態を考えるグループである。



Dialogue

Creating the Next 60 Years

例えば、ICUの会計を担当する部署にインタビューを行った結果、環境対策費としてまとめられた項目は存在しないことがわかった。

ICUは環境宣言を行ってはいるが、具体的な取り組みは十分とは言えないようだ。環境宣言の責任を果たすためにも、環境報告書を作成、そして環境を専門に扱う部署・組織をつくる必要があるであろう、と提言した。



第2部 参加者によるグループディスカッション —アクションプラン作成に向けて

「自分たちに今何ができるのか、具体的なアクションを提言することが今日のゴールです。肩書なしの一人のICUの構成員としてディスカッションするためにある儀式を行います」という布柴教授の提案に、参加者一同照れながらも、肩書という服を脱ぐ仕草をすることで一段と和やかな雰囲気に入れられ、笑い声とともにグループディスカッションは始まった。

アランダムに5つのグループに分かれ、小さな取り組みから、ICU全体に関わるアクションまで、思いつくままに各自が紙に書きだしていく。その際、布柴教授から挙げられた約束が、

- ・出てきたアイデアを批判しない、どんどんほめる。
- ・いいアイデアを出そうとしない。
- ・自分の中で、勝手に判断しない。
- ・人のアイデアに乗っかることを躊躇しない。

の4点だ。これらは、たとえ1年生の学生であっても、臆することなく意見を出し合える工夫である。



Dialogue



Creating the Next 60 Years



Dialogue

Creating the Next 60 Years

意見が出そろった所で、各グループで検討された提案を、個人でできる簡単な取り組み、工夫が必要だがやる価値がある提案、費用がかかるがチャレンジしたい事業、という大きく3つのグループに分け、その中でも優先順位が高いと思われる項目をホワイトボードに貼り付け、発表が始まった。

主な提案は以下の通りだ。



★個人でできる簡単な取り組み

- ・電気をこまめに消す、エレベーターに極力乗らない
- ・環境宣言を目立つところに掲示する。環境に関する啓蒙活動
- ・紙媒体の配布をやめる
- ・トイレトペーパーの使い方の共有
- ・再生紙ボックスを作る

★工夫が必要だけど、やる価値がある提案

- ・毎年環境報告を作成し、公表する
- ・環境委員会(学生と教職員から構成)を立ち上げる
- ・ソーラーパネルの設置
- ・情報共有

★費用がかかるが、チャレンジしたい事業

- ・食堂で地産地消を実施する
- ・井戸水による室温調整
- ・本館のトイレの自動化
- ・新寮が環境に優しい建物にならなかったか調べて明らかにする
- ・環境に関する科目を必修にする
- ・保安用車両を軽自動車にする

Dialogue

Creating the Next 60 Years

活発な議論のまとめとして、本ワークショップのコメントーターでもある山本良一客員教授からは、「実はICUのこのような環境に対する取り組みは、世間的には、2周遅れなんです」という、いささか衝撃的な意見が出された。法律上、国立大学は環境報告書を公表する義務があり、ICUは、国連のグローバルコンパクトに署名し、環境宣言もしているのだから、環境基礎単位を必修にするぐらいの取り組みが必要だという。



今回のディスカッションのゴールは、ただ提案を挙げるだけではなく、実際に行動に結びつけることであったが、最後に副学長から、以下3点が約束された。

- ・学生、教職員によって構成されるサステナビリティ委員会の設置の検討
- ・食堂委員会に対して、地産地消フェアの実現、そして持ち帰り用のプラスチックケースの検討
- ・60周年記念事業の一環として、学生全員が環境に関する必修科目を履修するようプログラム変更を検討

またこのアクションが継続して行われるよう、学内のウェブサイトには報告ページを設けることになった。参加した教職員、学生誰もが、一人のICU構成員として、率直に意見を出し合い、熱のこもった議論が取り交わされ、具体的な行動を導き出した本ワークショップ、今後継続して成果を出していくことができるのか、参加者誰もが今後の動きを期待し、その思いを込めた拍手で締めくくられた。